

これまで薬物乱用防止教室をしてきて、生徒およびその父兄から受けた質問について、その回答を整理します。

Q. 危険ドラッグとそうではないハーブやアロマの見分け方・買い方は？

A. 危険ドラッグの販売方法は年々巧妙化し、パッケージなどの見た目だけでは、そうではないハーブと見分けることは簡単にできません。危険ドラッグを誤って購入しないためには、1) 安いからといってむやみにインターネット等で購入しない、2) 成分分析が正しく行われているものを購入する、3) 信頼のおける大手のショップから購入することを勧めます。

Q. 覚せい剤・向精神薬等の正しい医療目的・使い方は何ですか？

A. 覚せい剤は、睡眠薬などを致死量まで飲んだ時などに処方されることがあります。また向精神薬は、強度のうつ病といった自殺の危機がある精神病患者などに処方されます。覚せい剤・向精神薬は脳に危害を加える薬であるために、このように死といった最も危険な状況などにのみ処方されます。また処方する際も必要最低限量だけが注意深くすることとなっています。

Q. 医療目的の覚せい剤・向精神薬等はどうしたら手に入りますか？

A. 医療目的の覚せい剤・向精神薬は脳に危害を加える薬であるために、このように死といった最も危険な状況などにのみ処方されます。また乱用を防ぐために、病院では金庫に厳重に保管することが義務づけられ、医師あるいは看護師の厳しい監視下でのみ処方されます。

Q. たった一回の乱用で依存性・耐性がつくというのはどういうことですか？

A. 医学的には、薬物の依存性・耐性は乱用した薬物の量に比例します。しかし薬物乱用の依存性・耐性を招く社会的環境要因あるいは個人的心因的要因は、乱用する薬物の量に関わらず存在するということが、医療関係の専門家による数多くの研究によって指摘されています。こうした理由から、一回の乱用をする者は乱用を繰り返し薬物への依存を深めていくと考えられています。薬物乱用を招く社会的環境要因として、1) 薬物の入手しやすさ、2) 経済的貧困、3) 住民同士の絆に乏しい地域社会などが挙げられます。個人的心因要因として、1) 高い好奇心にたいし危険への注意力が乏しい、2) 家族のアルコールおよび薬物の使用、3) 一貫しない親の養育態度と家庭内暴力、4) 低い知的能力と学業等の乏しい達成感、5) 友人からの疎外といじめなどが挙げられます。

Q. 家族として、薬物乱用はどのように防ぐことができますか？

A. 若者の中には薬物乱用をする危険要因のあるものは、必ず一定割合存在します。こうした者たちの薬物乱用防止は、地域や家族の努力によって効果的に行うことができることが、医療関係の専門家による数多くの研究で指摘されています。それらは、1) 絆のある家庭環境があること、2) 地域の行事に参加することで、地域との絆があること、3) 学課内あるいは課外の活動に参加していること、4) 周囲の人たちが非常識な行動に対し不寛容な態度をとること、5) 地域の相談所や支援サービスに頼ることなどが挙げられます。

Q. 薬物乱用者にはどのように対応すればよいでしょうか？

A. 薬物乱用者は、心身の理性的制御ができない場合があります。こうした重度の薬物乱用者は、精神の錯乱から発作的に予想外の暴力をふるうことがあります。たとえ腕力に自信があっても一人で対処せず、自己の安全のために、警察などに相談することをお勧めします。

Q. 麻薬の合法化とはどういうことでしょうか？

A. 現在、末期ガンなどの痛み緩和に麻薬は合法的に使用することができます。国際的には一部の国において嗜好目的の麻薬（マリファナ）が認められている国もあります。それは身体へ害が認められるもの比較的軽微とされる一方、マフィアといった犯罪組織の資金源となることが社会的コスト（取り締まりにかかる公的費用）として高いとされるからです。しかし嗜好目的の麻薬の使用は、より作用が強く身体への害が大きい薬物への使用を促進することから、合法化に対する反対の意見が大きいのが実情です。